

三村 將 (監), 酒井 浩, 宮口 英樹, 横井 賀津志 (編)

作業療法に役立つ臨床推論 高次脳機能障害の生活障害を分析する 推論思考過程の理解

中 村 春 基

(日本作業療法士協会, 会長)



まずもって, 上記タイトルの書籍が上梓されたことをうれしく思う。本書の特徴については, 監修の三村 將氏が述べているが, 酒井 浩氏のこれまでの臨床での経験, 学び, そして臨床を思う気持ちが凝縮されている。新人は, 臨床推論の重要性, そのまとめであるレジュメの紹介, 振り返り, 症状と損傷領域の対応表, トピックス, 深掘りの作業等々, 今後, 何を, どのように学び, その結果がどうつながっていくのかを, 本書を読むことでイメージできる。著者の多くが, この道のスペシャリストであり, 読者がここに記述された内容の深みを納得できるまでは, 努力してもある程度の臨床経験を要すると思うが, 本書は自らの成長を確認するマイルストーンの一つであり, 手元において自分の臨床推論と比較し, 本書にない事象を発見されることを願っている。

私事として本書を振り返ると, 推論過程はどうやら, 昔から行っていたことと同じである。ほっとした次第である。しかし, 本書の

主題である高次脳機能障害の臨床推論になると, 「歯が立たない」。リープマンの古典的分類, 責任病巣といった知識では, 複雑な脳機能障害を理解し切れないことが, 本書を読むとよくわかる。私同様に, 本書を読み, 「焦り」を感じた読者が, 本書をはじめ, 最新の脳科学, 高次脳機能障害に関する書籍に目を通す, あるいは, 関連学会, 研修会等に参画するようになれば, 著者一同も本望であろう。

本書の索引を見ていただくとその特徴がよくわかる。たとえば, 「観念失行」をみると, p53, p67, p109, p151, p224, p227 とある。実は, この反復こそが, 浅学の私の知識を繰り返し補完し, 1~7 章までを完読すると, 先の「焦り」に対する, 具体的な自己変容の方向性を示してくれる。各種の脳内ネットワークの記述は, 詳細な解剖の知識の必要を自覚させ, そこから導かれる臨床推論は新鮮である。そして何よりも, それを作業療法の実践まで「つなげた」ことが本書の真髄といえる。

丁寧に記載された症例のレジュ

メ, 観察の視点や検査結果の解釈, 脳画像, ネットワーク理論に基づく推論は, あたかも, 推理小説の物語性を感じる。聞きなれない単語に始めはまったくついていけない感じの読者もいると思うが, ここは「我慢」。読み進めていただければ, 経験のどこかに触れることは間違いなくある。もちろん, 担当している患者の障害と重ね合わせてお読みいただければ, さらに理解は進むだろう。

各章の紹介もしたいが, ぜひ, 手元に置いて, 読者それぞれの書評(感想)を著者にお届けいただければと思う。タイトルと齟齬のない内容であることは保証する。最後に, 本書は高次脳機能障害の作業療法に焦点を当てているが, 人の行動の理解, 脳機能と作業を結びつける書籍として価値ある書籍である。ぜひ, 多くの関係者に読まれ, 活用されることを願っている。

B5 判 312 頁 4,500 円+税
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357